

## 資料紹介 静岡県浜松市天竜区春野町伝来の鏡

Material report : Mirrors inherited in Haruno town, Tenryū Ward,  
Hamamatsu City, Shizuoka Prefecture

植松 勇介  
Yūsuke UEMATSU

(平成22年10月6日受理)

### 要旨

静岡県浜松市天竜区春野町の旧家、藤原家と鈴木家には近代以前の鏡がまとめて遺存している。筆者はそれらを実見することができたので、法量および現況をまとめ、背面の図様を解釈しつつ製作年代を推定した。

まず、藤原家には7面が所蔵される。いずれも銘文や墨書がなく、文書も付属していないため、由緒は明らかでない。製作時期は平安時代後期から江戸時代後期に及ぶが、平安時代後期と江戸時代後期の鏡は各1面のみであり、中世の鏡が多い。7面には出土品の様相は認められず、土中に埋もれることなく伝世したようである。法隆寺など各地の社寺に伝来した鏡と近似したものもあるが、類例のない図様を鋳出した鏡も含まれており、中世の鏡の多様性が窺われる。

一方、鈴木家の鏡は8面あり、同家が祀る熊野神社に伝来したものが7面、熊野神社北側の山裾から出土したものが1面という。筆者が実見できた3面のうち、2面は状態が良好なことから熊野神社の伝来品と思われる。それぞれ平安時代後期(12世紀後半)と室町時代後期(15世紀後半)の製作だろう。もう1面は一部が破損しており、土砂も付着しているため、熊野神社の北側で出土したものと見られる。この鏡は平安時代後期(12世紀前半)に盛行した所謂「多度式鏡」であり、東日本には伝世品・出土品が少なく、貴重な例である。鈴木家蔵鏡も施入の経緯や時期、埋納時期は判然としない。

中世の鏡はほとんどが京都で製作されたと考えられており、藤原家および鈴木家の鏡も様々な経路で京都から当地にもたらされたものだろう。当地における人との往來を考える上で重要な遺品である。

### 1. はじめに

かつて筆者は静岡県浜松市天竜区春野町(以下、春野町)の石切八幡神社に伝わる鏡について小考を発表した<sup>①</sup>。調査を進めるなかで同町の藤原家と鈴木家に近代以前の鏡がまとめて遺存していることを知った。各位のご厚意とご尽力によってそれらを実見できたので、得られた知見を報告し、今後の地域研究に資したいと思う。

## 2. 藤原家蔵鏡

まず、藤原家蔵鏡を取りあげる。実見調査は平成21年（2009）8月20日に行った。藤原家に伝わる鏡は7面で、便宜上、F1号～F7号と呼ぶ。名称は付けない。鏡の名称は研究者によって付与方針が異なっており、未だ統一基準が確立していないからである。各々法量および現況をまとめ、背面の図様を解釈しつつ製作年代を推定した。

藤原家は春野町の最奥、京丸地区の旧家で、家祖は戦乱を避けて京から移住してきた貴族とも後醍醐天皇の首級を奉持して隠棲した南朝の廷臣とも伝えられる<sup>(2)</sup>。藤原家の始祖伝承は早くから民俗学者の関心を集め、折口信夫や柳田国男も言及しているが<sup>(3)</sup>、15世紀半ばには既に当地の有力者になっていたらしい。藤原家の阿弥陀堂には阿弥陀三尊像が安置されており、中尊の阿弥陀如来立像の光背裏には「藤原國吉刑口（部）尉」が僧の梵雄を導師として信濃善光寺の阿弥陀如来を勧請し、本像を寛正5年（1464）11月28日に造立したという由緒が墨書されている<sup>(4)</sup>。ただし、鏡7面の来歴については明らかでない。

### 【F1号】（図1）<sup>(5)</sup>

〔法量〕 面径10.7cm、縁幅0.35cm、縁高0.7cm、重量143.0g

〔所見〕

銅鑄造製で、地金は白銀色を帯びる。ただし、現状では表裏とも汚れに覆われ、薄い黄色に見える。割れや欠損はなく、緑青も認められない。縁はほぼ垂直に立ち上がり、やや外側へ傾斜する。

表面は研磨され、鍍錫も施されている。銘文や神仏像は刻まれていない。

背面には凸界圈を設けて内区と外区に区画する。図様の表出は概ね鮮明だが、界圈上に铸つぶれている箇所がある。内区には七宝丸文を3つ散らし、七宝丸文のあいだに2羽の雀と1匹の蝶を铸出す。双雀と蝶にはそれぞれ岩塊が添えられている。七宝丸文の中心にはいずれも花びらが尖った4弁花を配し、周囲の区画には3つの小点を3組ずつ打っている。双雀は1羽が先行してもう1羽がそれに追従しており、蝶は岩塊の上で翅を休めている。鈕は円錐形で、頂部が丸く加工され、孔が貫通する。鈕には円形の座が付属する。鈕座の周囲には小珠を巡らせている。

外区には一定の間隔を置いて6ヶ所に水波を表出する。

F1号の七宝丸文は、例えば、大阪市の四天王寺に伝来した懸守の金具（図2）<sup>(6)</sup>に近い。四天王寺には他に6つの懸守が伝存しており、錦や金具の特徴からいずれも12世紀後半、平安時代後期の製作と見られている。一方、F1号のように丸文を表出する鏡も12世紀後半から現れる。鰐淵寺（島根県出雲市）の蔵王窟内で仁平3年（1153）銘の滑石製経筒と共に出土した鏡（図3）<sup>(7)</sup>はその最初期の例だろう。この鏡とF1号は小珠を巡らせた鈕座や外区の水波も類似している。従って、F1号も12世紀後半、平安時代後期に製作されたものと考えられる。

### 【F2号】（図4）

〔法量〕 面径11.7cm、縁幅0.3cm、縁高1.0cm、重量228.1g

〔所見〕

銅鑄造製で、地金はやや黄色を帯びる。割れや欠損はなく、発錆も見られない。縁は高く、ほぼ垂直に立ち上がり、中央部がわずかにふくらむ。

表面はよく研磨されている。現状では鍍錫の形跡は確認できず、銘文や神仏像も刻まれていない。

背面の図様は鮮明である。凸界圈を設けて内区と外区に区画する。内外区とも水波が広がっているが、界圈を越えて連続しているものはない。水波は奔放に表されており、その流れに規則性はないようである。鈕は円錐形で、頂部を丸く加工する。孔の内部に鋳型土が残存している。鈕には円形の座が付属し、花蕊を思わせる装飾が周囲を巡っている。鈕の下方には2羽の雀を鋳出す。双雀は共に翼を広げて左から右へ飛翔し、先行する雀が後続の雀を振り返っている。

水波を主題とする鏡は12世紀後半には出現している<sup>(8)</sup>。しかし、F 2号のように水波を背面全体に隙間なく展開させた例はかなり珍しい。むしろ、F 2号の水波は地文に近い。図5<sup>(9)</sup>にあげた鏡は亀甲地文だが、間地を残さない感覚はF 2号と軌を一にしよう。鏡に地文を作る手法は14世紀前半、鎌倉時代後期から行われるようになった。図5の鏡にも嘉暦3年(1328)の年号が墨書されている<sup>(10)</sup>。従って、F 2号の製作年代も14世紀前半、鎌倉時代後期と考えられる。

#### 【F 3号】(図6)

〔法量〕面径11.3cm、縁幅0.3cm、縁高0.75cm、重量188.2g

〔所見〕

銅鑄造製で、地金はやや赤みを帯びる。割れや欠損はないが、背面が灰白色の汚れで覆われている。縁はほぼ垂直に立ち上がり、わずかに外側へ傾斜する。

表面は研磨されている。現状では鍍錫の形跡は確認できず、銘文や神仏像も刻まれていない。

背面の図様はやや鈍い。凸界圈を設けて内区と外区に区画するが、亀甲文が地文として背面全体に展開する。亀甲内には小点8つを円形に打ち、その中心に小点1つを入れている。鈕は円錐形で、頂部が丸く、孔が貫通する。花蕊座が付属している。

内区には2羽の雀を鋳出す。双雀は共に翼を広げ、1羽がもう1羽を追いかけているようにも見える。形姿から判断すると、2羽は6時方向に位置させるのが穏当だろう。

先述のように亀甲文を背面全体に展開させた鏡は14世紀前半、鎌倉時代後期から現れる(図5)。ただし、F 3号の双雀は翼が短く、形姿も硬直化しており、製作年代の下降を窺わせる。F 3号は14世紀後半、南北朝時代に製作されたものと思われる。

#### 【F 4号】(図7)

〔法量〕面径11.5cm、縁幅0.35cm、縁高0.6cm、重量173.3g

〔所見〕

銅鑄造製で、地金は黄色を帯びる。割れや欠損はなく、発錆も見られない。縁はほぼ垂直に立ち上がり、やや外側へ傾斜する。

表面に鍍錫は認められず、銘文や神仏像も刻まれていない。小さな凹みが1ヶ所ある。懸垂用の孔を穿とうと試みたものの、途中で放棄した痕跡だろうか。

背面の図様はやや鈍い。凸界圈を設けて内区と外区に区画する。内区には2羽の雀と牡丹を思わせる瑞花を表す。双雀は12時方向に表されており、両翼を広げて向かい合っている。瑞花は6弁のものが1つ、3弁のものが4つあり、6時方向に位置する6弁花の左右に3弁花を2つずつ配している。また、短い直線を等間隔で刻んだ圈帯、櫛歯文帯を界圈

に内接させ、その内側に鋸歯文帯を巡らせている。鈕は円錐形で、頂部を削平しており、孔が貫通する。鈕には花蕊座が付属する。

外区は細い二重凸線でさらに分割され、内側に鋸歯文帯、外側に櫛歯文帯を表出する。櫛歯文帯や鋸歯文帯は漢時代の中国鏡にしばしば見られることから、平安時代以降に日本で製作された鏡のうち、こうした幾何学文帯のあるものを一般に「擬漢式鏡」と呼んでいる。

F 4 号の類例には法隆寺西円堂伝来鏡〔元徳 3 年（1331）墨書〕（図 8）<sup>(11)</sup>や鹿児島県蒲生町の蒲生八幡神社伝来鏡〔康永 2 年（1343）銘〕、現在は個人所蔵の武蔵国六所神社伝来鏡〔永和 3 年（1377）銘〕などがあげられる<sup>(12)</sup>。いずれも界圏を挟んで二重の幾何学文帯を巡らせている。特に、法隆寺の元徳 3 年鏡は界圏外側の幾何学文帯が鋸歯文帯と櫛歯文帯になっており、F 4 号とは内外が逆だが、その構成はかなり近い。従って、F 4 号も 14 世紀中頃から後半、鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて製作されたものだろう。

#### 【F 5 号】（図 9）

〔法量〕面径10.4cm、縁幅0.3cm、縁高0.9cm、重量223.8g

〔所見〕

銅鑄造製で、地金は赤みを帯びる。割れや欠損はなく、緑青も少ない。縁は高く、ほぼ垂直に立ち上がっている。

表面は研磨されているようだが、汚れが厚く覆っている。銘文や神仏像は認められない。

背面の図様は鮮明である。六花形の凸界圏を設けて内区と外区に区画する。また、界圏内側の12ヶ所に3つずつ小珠を置いている。内区下方には水波が広がり、その水平線上から岩山が屹立する。岩山の頂上付近には松があり、三角形の針葉を張り出している。鈕は亀形で、孔が貫通するが、孔の内部には鋳型土が残存する。甲羅に亀甲形を作らず、菊花菱を1つ表す。亀は頭を9時方向へ向け、その鼻先に2羽の雀が集っている。双雀は向かい合って飛翔するが、亀の鼻先と双雀の嘴は接触していない。双雀の下方にも岩塊があり、竹が1本生えている。10時方向から伸びる竹葉はその枝だろうか。

外区は界圏の外側に櫛歯文帯があり、さらに、連珠文帯、櫛歯文帯が巡っている。連珠文帯は櫛歯文帯より一段高く、小珠には縁取りがある。

F 5 号の内区の図様は先掲の元徳 3 年鏡に見られ、鎌倉時代末期（14 世紀前半）から行われたものである。しかし、界圏内側の12ヶ所に小珠を3つずつ置いた鏡は15 世紀に入ってから見られる。例えば、応永20年（1413）の年号が墨書された法隆寺西円堂伝来鏡（図 10）<sup>(13)</sup>があげられる。F 5 号と応永20年鏡は界圏の形状や外区の幾何学文帯の構成も近い。F 5 号も15 世紀前半、室町時代前期の製作と考えられる。

#### 【F 6 号】（図11）

〔法量〕面径8.8cm、縁幅0.2cm、縁高0.7cm、重量142.1g

〔所見〕

銅鑄造製で、地金は赤みを帯びる。割れや欠損はなく、緑青も認められない。縁はほぼ垂直に立ち上がり、やや内側へ傾斜する。

表面は研磨されているが、鍍錫の痕跡はなく、銘文や神仏像も刻まれていない。

背面の図様はやや鈍い。凸界圏を設けて内区と外区に区画する。界圏の内側4ヶ所に三角形が作られている。この三角形はF 5 号に見られるような花形界圏の切り込み部分を簡

略化したものと考えられており<sup>(14)</sup>、通例では等間隔で配置される。F 6号では2時と4時方向の2ヶ所が省かれているようである。

内区下方には水波と洲浜が広がり、洲浜の右端から松が伸びる。松は幹が細く曲折しており、釣鐘形の針葉が笠状に張り出している。10時方向には竹の葉が繁るが、幹は見えない。洲浜の上にも低い竹が生えている。鈕は亀形で、孔が貫通する。孔の内部に繊維質が残存している。甲羅の上には菊花菱を1つ鑄出し、亀甲形を作らない。亀は頭を9時方向へ向け、その鼻先に飛翔する2羽の雀が集っている。ただし、亀と双雀は互いに接触していない。また、界圏に内接して櫛歯文帯が巡っている。

外区は内側から順に櫛歯文帯、連珠文帯、櫛歯文帯が巡る。連珠文帯は櫛歯文帯より一段高く、一定の間隔をあけて小珠を7粒ずつ6ヶ所に並べる。小珠は概ね楕円形だが、不揃いで、縁取りもない。

三角形の突起が付いた円形の界圏と一定の間隔をあけて小珠を配した連珠文帯の組み合わせは14世紀半ばから見られるようだが<sup>(15)</sup>、15世紀前半までは連珠文帯の小珠に縁取りがあり、形状も整っている。一方、縁取りがない楕円形の小珠は15世紀後半まで下がる。長享2年(1488)の年号が墨書された法隆寺西円堂伝来鏡(図12)<sup>(16)</sup>がその好例だろう。従って、F 6号は15世紀後半、室町時代後期に製作されたものと思われる。

#### 【F 7号】(図13)

〔法量〕面径10.4cm、縁幅0.3cm、縁高1.1cm、重量226.2g

〔所見〕

銅鑄造製で、地金は赤みを帯る。割れや欠損はなく、緑青も認められない。縁が高く、ほぼ垂直に立ち上がり、やや内側へ傾斜する。

表面は研磨され、鍍錫も施されている。銘文や神仏像は刻まれていない。

背面の図様はやや鈍い。二重の凸界圏を巡らせて内区と外区に区画するが、図様は連続している。背面の下方に洲浜が広がり、その右端に松が生える。松は反時計回りに幹を曲げ、笠状にまとまった釣鐘形の針葉を張り出している。界圏の外側にも針葉が展開する。洲浜の左端には竹かと思われる植物が伸びるが、細部は判別できない。鈕は亀形で、鈕孔が貫通する。甲羅には亀甲形を作って各々に二重円を入れる。亀は頭を9時方向へ向け、その鼻先に2羽の鶴が上下から嘴を接している。双鶴は共に洲浜に降り立ち、上位の鶴は翼を広げ、下位の鶴は翼を閉じている。下位の鶴の足元にも針葉が並ぶ。12時方向には桐文を配す。3枚の葉に花の数が3・5・3の花茎を組み合わせた所謂「五三桐」である。また、5時方向には「天下一」と陽鑄する<sup>(17)</sup>。

F 7号の図様は所謂「蓬萊図」だが<sup>(18)</sup>、形骸化が著しい。洲浜の砂と松の樹皮が同じ点描で表現され、針葉も単純な釣鐘形となり、界圏の外側に展開する針葉は幹との関係がはっきりしない。双鶴も形姿が硬直しており、特に下位の鶴は腹部と尾羽が融合して鶉のように尻ぶくれとなっている。

F 7号の類品は枚挙に暇がない。しかし、年代を限定できるものは意外に少ない。遠州地方では磐田市岩井に位置する安全寺境内墳墓群の1号墓で出土した例(図14)<sup>(19)</sup>が知られる。F 7号と安全寺1号墓出土鏡は図様の構成が近く、二重界圏、天下一銘も共通する。しかし、F 7号に比べて安全寺1号墓出土鏡の図様はやや写実的である。松樹の幹が高肉になっており、鶴の尾羽も弁別できる。安全寺1号墓では17世紀末から18世紀後半のかわ



らが出土しているので<sup>(20)</sup>、鏡もその頃のものだろう。F 7号は安全寺1号墓出土鏡より明らかに退歩しており、18世紀末から19世紀初頭、江戸時代後期の製作と思われる。

### 3. 鈴木家蔵鏡

続いて、鈴木家蔵鏡を取りあげる。鈴木家は春野町豊岡の旧家で、家祖は永正3年(1506)に近江国から婿入りしたという<sup>(21)</sup>。代々神職を務め、屋敷の裏山に熊野神社を祀っている。鈴木家にはこの熊野神社に伝来した7面と近年になって神社北側の山裾から出土した1面が所蔵される<sup>(22)</sup>。7面のうち、浜松市春野歴史民俗資料館に寄託されている3面について平成21年(2009)8月21日に実見調査を行った。各々S1～S3号と呼称する。

#### 【S1号】(図15)

〔法量〕面径8.6cm、縁幅0.3cm、縁高0.2cm、重量31.7g

〔所見〕

銅鑄造製で、地金は白銀色を帯びる。外周が細かく欠損し、11時方向には亀裂が入る。また、一部に歪みが生じている。土砂も付着しているため、出土品と思われる。熊野神社北側の山裾で出土したという1面はこのS1号だろう。縁は低く、断面が三角形を呈している。

表面はよく研磨されているが、大きな傷が2本走っている。銘文や神仏像は刻まれていない。

背面の図様は鮮明である。界圏は設けない。4時方向から芒および女郎花と思われる草花が鈕を巻き込むように反時計回りで伸びており、その延長線上に2羽の小禽が飛翔する。小禽は共に尾が長く、先行する1羽は後方を振り返っている。鈕は上下に細長く、孔が貫通している。

S1号のように鈕が細長く、縁の断面が三角形で、界圏のない鏡は「多度式鏡」と呼ばれている。三重県桑名市に鎮座する多度大社の境内から同形式の鏡が15面まとまって出土したことに由来するようだが、多度式鏡は宋時代の中国鏡から影響を受けて成立したと考えられており<sup>(23)</sup>、12世紀前半に盛行した。

図16<sup>(24)</sup>は福岡県直方市の永満寺経塚から出土した。永満寺経塚では永久元年(1113)銘および同3年(1115)銘の経筒が伴出している。秋草の種類はS1号と異なるが、4時方向から鈕を反時計回りに巻き込む姿勢は共通し、戯れるように飛翔する双鳥の表現や位置もS1号に近い。S1号もやはり12世紀前半、平安時代後期の製作と考えられる。

#### 【S2号】(図17)

〔法量〕面径10.3cm、縁幅0.2cm、縁高0.6cm、重量90.3g

〔所見〕

銅鑄造製で、地金は白銀色を帯びる。縁は薄く、ほぼ垂直に立ち上がり、わずかに外側へ傾斜する。鑄かけ直しが2ヶ所あり、一方は1.2×0.6cmの釣鐘形、もう一方は0.3×0.2cmの楕円形を呈している。懸垂用の孔を塞いだ痕跡だろうか。土砂の付着や破損といった出土品の様相が認められないため、S2号は熊野神社に伝来したのものと思われる。

表面は平滑だが、緑青と汚れに覆われている。銘文や神仏像は刻まれていないようである。

背面は一部が黒ずんでいる。細い凸界圈を巡らせ、松葉と小禽を鋳出すが、表出が鈍いため図様を判別しにくい。松葉は低い二等辺三角形にまとまり、若芽を3本立てる。界圈上に展開し、概して先端を内側へ向けている。小禽は2羽表されており、共に尾が長く、鈕を挟んで時計回りに飛翔する。ただし、鈕を中心とした点対称に配置されているわけではない。鈕は小さな円錐形で、頂部が丸い。孔が貫通している。鈕には振った菊花を思わせる座、いわゆる「振菊座」が付属する。

S2号の図様はあまり例がないが、低い二等辺三角形にまとまって若芽を3本立てた松葉は12世紀末の鏡にしばしば見られる。例えば、図18<sup>(25)</sup>が参考になろう。この鏡は滋賀県近江八幡市の福寿寺に伝わったもので、嘉応2年(1170)造立の千手観音立像の像内に納入されていた。薄い縁や振菊座もこの頃の特徴であり、S2号は12世紀末、平安時代後期に製作されたものと考えられる。

### 【S3号】(図19)

〔法量〕面径9.9cm、縁幅0.25cm、縁高0.9cm、重量199.8g

〔所見〕

銅鑄造製で、地金は赤みを帯びる。割れや欠損はなく、緑青も少ないが、表裏とも白色の汚れが付着している。縁は高く、ほぼ垂直に立ち上がり、わずかに内側へ傾斜する。S2号と同じく出土品の様相が認められないため、S3号も熊野神社の伝来品だろう。

表面は研磨されている。銘文や神仏像は認められない。

背面の図様は概ね鮮明である。凸界圈を設けて内区と外区に区画し、F6号のように界圈の内側6箇所には三角形を置く。また、連珠文も巡らせている。

内区の下方には水波と洲浜が広がり、洲浜の右端から松が伸びる。鈕を覆うように張り出した松葉に藤が絡みつき、花房を垂下している。鈕は亀形で、孔が貫通する。孔の内部には繊維質が残存している。甲羅に亀甲形を作らず、花菱を1つ表す。亀は頭を9時方向へ向け、その鼻先で2羽の雀が嘴を接するが、亀の鼻先とは触れていない。

外区は界圈の外側に櫛歯文帯があり、さらに、連珠文帯、櫛歯文帯が巡る。連珠文帯は櫛歯文帯より一段高く、小珠を7粒ずつ6ヶ所に分けて並べている。

S3号の類例には永享10年(1438)の年号が墨書された法隆寺西円堂伝来鏡があげられる(図20)<sup>(26)</sup>。鈕の形状や植物の種類は異なるが、内区下方の水波と洲浜、反時計回りに伸びる植物の形姿、8時方向で正対する双雀はS3号に類似し、界圈内側の三角形や連珠文も共通している。ただし、永享10年鏡では外区の小珠に縁取りがあるが、S3号の小珠に縁取りはなく、むしろ、F6号やその類例として示した長享2年鏡に見られるものに近い。従って、S3号の製作年代は永享10年よりやや下降し、15世紀後半、室町時代後期と考えられる。

## 4. 結び

本稿では静岡県浜松市天竜区春野町の藤原家および鈴木家に所蔵される鏡について実見調査から得られた知見をまとめ、製作年代の推定を試みた。

まず、藤原家蔵鏡7面は製作時期が平安時代後期から江戸時代後期に及ぶ。しかし、平安時代後期と江戸時代後期の鏡はそれぞれ1面のみであり、中世の鏡が多い。いずれも発

掘品の様相は認められない。土中に埋もれることなく伝世したようである。7面には銘文や墨書はなく、来歴を示す文書も付属しないため、藤原家に入った時期は詳らかでない。

藤原家蔵鏡のうち、特にF2号が注目される。F2号は背面全体に水波を表し、その他には2羽の雀しか見えない。中世の鏡では水波と双雀の組み合わせは珍しくないが、洲浜や岩礁もなく、水波と双雀のみを鋳出した例は管見のうちでは知らない。水波も定型化することなく自在に刻まれており、造形上も優れている。F2号は中世の鏡の多様性を物語る好例と言えよう。

一方、鈴木家には鏡が8面あり、同家が祀る熊野神社に伝来したものが7面、熊野神社北側の山裾から出土したものが1面という。筆者が実見できた3面のうち、破損状況や付着土砂の有無からS2号とS3号が前者、S1号が後者と見られる。S2号は平安時代後期(12世紀後半)、S3号は室町時代後期(15世紀後半)の製作だろう。しかし、両鏡とも施入の経緯や時期は詳らかでない。また、S1号の製作時期は平安時代後期(12世紀前半)と考えられるが、出土状況や伴出遺物が明らかなでないため、やはり埋納時期を限定できない。

鈴木家蔵鏡ではS1号が注目される。先述したようにS1号は所謂「多度式鏡」である。多度式鏡は西日本に偏在し、東日本では伝世例・出土例が少ない<sup>(27)</sup>。静岡県では三ツ谷新田経塚(三島市)で2面<sup>(28)</sup>、香貫山経塚(沼津市)で1面、千鳥道経塚(沼津市)で1面<sup>(29)</sup>出土し、只木神明宮(浜松市北区)に1面<sup>(30)</sup>伝世しているだけである。県内および東日本における多度式鏡の遺品としてS1号は貴重だろう。また、多度式鏡は社寺の伝世品や墳墓の副葬品より経塚で発見されるものが多い。S1号の出土状況ははっきりしないが、出土地に経塚が造営されていた可能性も視野に入れるべきではないかと思われる。

現代の春野町は都市部から遠く、交通の整備も充分でない。そこに中世の鏡がまとまって伝存していることに驚かされる。中世の鏡はほとんどが京都で生産されたらしく<sup>(31)</sup>、藤原家および鈴木家の鏡も様々な経路で京都から当地へもたらされたと考えられるべきだろう。それらは当地における人との往來を考える上でも多くの示唆を与えてくれるはずである。

## 註

- (1) 植松勇介「石切八幡神社伝来興国四年銘鏡について」(『静岡産業大学情報学部研究紀要』第12号掲載、藤枝市、2010年)。
- (2) 春野町史編さん委員会『春野町史』通史編上巻、静岡県春野町、1997年、319～324頁。
- (3) 折口信夫は大正9年(1920)に京丸を訪れており、藤原家に1泊したことが『信州採訪手帖』から知られる。また、柳田国男は昭和10年(1935)に発表した『地名の研究』のなかで京丸という地名について考察を行っている。
- (4) 春野町史編さん委員会『春野町の社寺棟札等調査報告書』、静岡県春野町、1993年、61頁。
- (5) 藤原家蔵鏡および鈴木家蔵鏡の写真はすべて筆者が撮影したものである。
- (6) 東京国立博物館保管写真第111801号
- (7) 東京国立博物館『鏡像』、東京、1975年、図46より転載。



- (8) 例えば、鰐淵寺の蔵王窟内で仁平3年(1153)銘の滑石製経筒と共に出土した鏡があげられる〔大阪市立博物館『扶桑紀年銘鏡図説』、大阪市、1938年、20頁〕。なお、鰐淵寺の蔵王窟ではこの鏡や図3にあげた鏡を含めて14面が出土している。
- (9) 註8同書、図48より転載。
- (10) 註8同書、82頁。
- (11) 東京美術学校『南都十大寺大鏡』第5輯「法隆寺大鏡」第5冊、大塚巧藝社(東京)、1933年、図75より転載。
- (12) 註8同書、86頁および95頁参照。
- (13) 註8同書、図67より転載。
- (14) 佐藤直子「法隆寺西円堂奉納の擬漢式鏡について」(『MUSEUM』第544号掲載、東京、1996年)、65頁。
- (15) 註14同論文、70頁。
- (16) 註8同書、図82より転載。
- (17) 天下一銘は16世紀後半に始まる。当初は公許制だったようだが、自称する者が増加したため、天和2年(1682)に使用が禁止された。江戸幕府の法令集、いわゆる『御觸書寛保集成』巻36の「天和二戌年七月」に、
- 一 町中にて諸事に、天下一之字書付彫付鑄付候儀、自今以後、御法度ニ候間、向後何によらず、天下一之字付申間敷候、勿論只今迄有來候鑑判鑄形板木書付等迄早々削取可申候、若違背仕もの有之におゐてハ、急度曲事可申付者也、
- 七月
- とある〔高柳眞三・石井良助『御觸書寛保集成』、岩波書店(東京)、1934年、1004頁〕。この禁令によって天下一銘は一時的に行われなくなるが、まもなく復活した。
- (18) 蓬萊図とは中国における伝説上の神山、蓬萊山を表した図様である。『列子』湯問篇には蓬萊山の情景が次のように叙述されている。
- 渤海之東、不知幾億萬里、有大壑焉……名曰歸墟……其中有五山焉。一曰、岱輿。二曰、員嶠。三曰、方壺。四曰、瀛洲。五曰、蓬萊……其上臺觀皆金玉、其上禽獸皆純縞。珠玕樹皆叢生、華實皆有滋味、食之、皆不老不死。所居之人、皆仙聖之種……而五山之根、無所連著、常隨潮波、上下往還、不得暫峙焉……帝恐流於西極失群仙之居、乃命禺彊、使巨鼇十五、舉首而戴之……五山始峙而不動。
- 即ち、蓬萊山は岱輿・員嶠・方壺・瀛洲と共に渤海の遙か東方に漂い、各々の山中には金銀珠玉で飾られた宮殿が建ち、純白の禽獸が戯れ、木々の果実を食すれば不老不死となり、神仙のみが暮らしているという。また、神山の流失を危惧した天帝が各々に巨亀を3匹ずつ遣わし、頭で支えさせたとも語られている。
- (19) 筆者撮影。
- (20) 磐田市埋蔵文化財センター『磐井安全寺境内墳墓群発掘調査報告書』、磐田市文化財保存顕彰会、1992年、12頁。
- (21) 春野町史編さん委員会『春野町史』資料編(2)近世、静岡県春野町、1991年、808～810頁。
- (22) 註4同書、92頁。
- (23) 久保智康「中世・近世の鏡」(『日本の美術』第394号掲載、東京、1999年)、22～23

頁。

(24) 東京国立博物館保管写真第46815号

(25) 註7同書、図71より転載。

(26) 註11同書、図76より転載。

(27) 福井県立博物館『古鏡の美－出土鏡を中心に－』、福井市、1986年、67頁。

(28) 清水吉彦「箱根山西錦田村三ツ谷新田地先發掘経塚様の物に就て」〔静岡県『静岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第9集所収、静岡市、1933年〕、4頁。

(29) 沼津市史編さん委員会『沼津市史』資料編「考古」、沼津市、2002年、515頁（千鳥道経塚）・529頁（香貫山経塚）。

なお、千鳥道経塚より出土した多度式鏡1面は所在不明らしい。

(30) 三ヶ日町教育委員会『三ヶ日町の文化財』、静岡県三ヶ日町、1981年、10頁。

(31) 久保智康「中世前期の鏡作り－ものづくり論と宗教・生活意識論をつなぐ－」〔入間田宣夫『兵たちの生活文化』〔『兵たちの時代』第2巻〕所収、高志書院（東京）、2010年〕、100頁。

#### 附記

資料の実見調査にあたって各位にご厚意とご尽力を賜った。深く感謝の意を表したい。

天野忍 佐口節司 鈴木常夫 高氏明美 花嶋徳光 林正延 藤原眞 渡邊武文

（50音順・敬称略）



図1 F1号



図2 四天王寺伝来懸守



図3 鰐淵寺蔵王窟内出土鏡



図4 F2号



図5 嘉暦3年墨書鏡（個人）



図6 F3号



図7 F4号



図8 法隆寺西門堂伝来元徳3年墨書鏡



図9 F5号



図10 法隆寺西門堂伝来応永20年墨書鏡



図11 F6号



図12 法隆寺西門堂伝来長享2年墨書鏡





図13 F7号



図14 安全寺境内墳墓群1号墓出土鏡  
(磐田市教育委員会)



図15 S1号



図16 永満寺経塚出土鏡  
(東京国立博物館)



図17 S2号



図18 福寿寺伝来千手観音立像納入鏡





図19 S3号



図20 法隆寺西円堂伝来永享10年墨書鏡